３　開発の実際【実践編】

「伝統・文化」体感型ワークショップ　【実践編①】

「能の謡」（受講者 238 名）

授業者：谷廣　進一（大阪府立夕陽丘高等学校教諭）

講　師：梅若　基徳

実施日：11 月 19 日（金）・26 日（金）・29 日（月）・12 月 3 日（金）

==========

■目的：・能楽の歴史や内容を知り、我が国の伝統・文化の理解を深める。

・「能の謡」を体験することにより、我が国の伝統･文化のよさや特徴を知る。

・「能の謡」が実演できるようになる。

■期待される効果：

・「能」をはじめとする我が国の伝統･文化に関心をもち、身近なものとして理解する。

・「能の謡」を体験し、発声の特徴を感じ取り、工夫して表現する。

■準備教材・設備等：

土足厳禁の会場、白足袋または白ソックス持参

■授業の流れ（②～④は外部講師を招聘）

①「能楽」についてＤＶＤ及び教材プリントによる解説

②謡「高砂」「千秋楽」の解説

実演、発声演習

③「能面」の解説

「装束体験」「能面つけ体験」「すり足体験」

④謡「高砂」「千秋楽」の演習、合唱、成果解説

仕舞の見方の解説

公演鑑賞　舞囃子「神楽」、仕舞「高砂」、仕舞「船弁慶」、仕舞「土蜘蛛」

⑤謡「高砂」「千秋楽」の復習

「高砂」「千秋楽」のいずれかを選択し、グループ発表、相互評価

■Advice points

・能の知識は個人差が大きいので、事前に生徒たちの「能」の認知度や疑問点をアンケート等で調査しておくと講師側からポイントを押さえて指導していただける。

・ワークショップ体験後に「能」を鑑賞すると、能楽への理解がさらに広がる。

実践発表 ー「能の謡」の魅力を伝えるー

府立夕陽丘高等学校　教諭　谷廣　進一

１　趣旨

グローバル化が叫ばれる今、生徒たちには将来国際人として活躍するための力が求められている。相手を理解するためには、まず自分を理解することが必要と考えるが、そのための土台となる「伝統・文化」について、生徒たちの知識や理解は決して十分でないと感じている。

今回「能の謡」を芸術科（音楽）の授業で取り上げることによって、「伝統・文化」に対する生徒たちの興味・関心を喚起し、体験活動を通じて、それらを尊重する精神を育むことが、他国の「伝統・文化」を認めることにつながり、ひいては互いの文化や歴史について理解しあう、真の意味での国際理解教育につながると考える。

２　授業の概要（左頁「授業の流れ」参照）

３　まとめ　～「伝える」から「育む」へ～

前述の趣旨に基づき、「伝統・文化に関する教育」の重要性を認識しつつも、ジャンルによっては教える側の知識やスキルが乏しいことは否めない。そこで、事前に府教育センター実施の「伝統・文化に関する教育」カリナビ･オープン講座を受講し、「能の謡」に関する知識・技能を予め習得したことは有効であった。

第２回～第４回の授業は外部講師（能楽師）を招聘して行った。実際に能の装束で登場いただき、生徒たちにとっては本物に触れることで、得るもの、感じるものが非常に大きかったと思われる。

事前のアンケート調査では、「能」に関する生徒の関心が低かったが、実際に体験するとさほど取っつき難いものではなく、むしろ新鮮な気持ちで積極的に取り組めたことが、事後のアンケート結果からもうかがえる。教える側としては、「できること（身近なこと）から始める」「生徒とともに学び、体験し、伝える」ことが、「伝統・文化」を尊重する心を「育む」ための一歩であることを実感した。